

天理市、桜井市、橿原市、明日香村 観光まちづくりへの提案

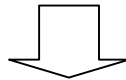
2012年3月
近畿観光まちづくりアドバイザー会議

【提 言】

奈良県中南和地域の3市1村は、日本史の黎明期に当たる邪馬台国からヤマト王権、飛鳥京・藤原京へと連なる歴史の舞台であり、関連する史跡、寺社などの資産も豊富である。地図上で4市村を結ぶと「J」の形状になる。JAPAN、日本発祥のエリアとして訴求できる地域である。しかし、奈良県内の観光においては、世界遺産に登録されている奈良市や斑鳩町など北和地域に偏重する傾向が強かった。世界遺産の有名社寺や宿泊施設も多くあることから、誘客に地域的偏りが顕著であった。

そこで、中南和地域の歴史文化資産、観光スポットをネットワーク化し情報発信力、観光商品力を高めることを目的に、今回3市1村が連携する方向へ動き始めた。世界遺産に選定されている北和地域や吉野地域に並ぶ観光エリアを打ち立てることは、中南和地域のみならず奈良県観光にとっても観光客誘致の軸になるものと期待される。

アドバイザー会議では地域連携を深化、強固にし、奈良観光の新たな軸とするため複数年スパンでの観光まちづくりへの方策を構築する方向性を打ち出すこととした。



中南和地域は、天理市～桜井市へ至る「山の辺の道」、藤原京や大和三山、今井町がある橿原市、石舞台をはじめとした史跡が点在する明日香村と、いずれもが歴史的な資産をベースにした「歩き観光」のスポットであると言える。鉄道やバスなどの公共交通あるいはマイカーなどで地域に訪れた場合でも、いずれも各ポイントでは歩き観光もしくはレンタサイクルが中心になる。これは、この地域の特長であり、充実した観光ボランティアガイドの受け入れ態勢を含め、時速3キロから10キロの視線でゆっくりと楽しむことを意味する。

そのため、史跡や寺社仏閣に限らず、歩き観光の特性として地域の様々な資源が観光スポットになりうる可能性を持ち、地域全体が歴史文化を中心とした総合博物館と言えるエリアになりうる。将来的にはさらに周辺市町を巻き込んでいき、国内外へ発信力の高い一大観光エリアになる可能性を有している。

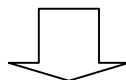
そこで、近畿観光まちづくりアドバイザー会議では、その端緒として歩き観光を軸として3市1村が有機的につながり連携を深めていくため次項以下の提案を行う。

○STEP 1 【現状分析と推進の方向】

現地視察の結果、地域全体のプラス点は「豊富な歴史文化遺産（資源）」「ボランティアガイド」「山の辺の道、大和三山などの自然」が挙げられた。歴史文化資源の豊富さは各委員とも認めるところだが、それぞれが“点”としての存在にとどまり、面的な広がりや欠如していると指摘する委員も多い。その要因は、域内2次交通の未整備によるところもあるが、本地域の特色が“歩き観光”であることを考慮すると、複数の委員が挙げている「イメージ、物語性の欠如」に起因するものが大きいのではないだろうか。

現地に行ってからでは、石上神宮や大神神社、石舞台などを中心とした類例のない貴重な資源と定点ガイドを含めた観光ボランティアガイドの評価が高いため、旅行する前にいかに選んでもらうかが大切である。また一度来てもらった人には二度、三度と選んでもらわなければならない。

そのためには、中南和地域の情報発信力を高める「統一テーマ・コンセプトとイメージ戦略に基づいた地域ブランド」づくりが必要であり、従来の歴史観光の価値をさらに高める観光コンテンツの提案や新規マーケットの開拓が求められるだろう。

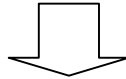


数多くの観光地の中から、この地域を選んでもらうためには個々の発信力では弱く、観光客の観光行動に即した面として発信していかなければならないと考える。面としての魅力を打ち出すためにも、地域全体で取り組むことが求められ、行政枠を越えた協議会的な場が望まれる。協議会は当面、3市1村の観光行政担当者をはじめ、観光ボランティアガイド、民間の観光事業者なども加わり立ち上げたい。まずは3市1村でエリアとして自立し、同時に周辺市町にも開かれた組織になるよう提案したい。もちろん4市村の連携を強固にする母体となると同時に、旅行会社や公共交通機関、あるいはウォーキング協会や社会人大学など生涯学習機関へのアピールや協働、連携の働きかけなども担う組織とし、逆にそれらからの要望があった時には対外的にこの組織が一元化するようにしたい。

まちづくりの主役は住民であり、3市1村で立ち上げた協議会はそれぞれの住民連携を促すことも意味する。その結果、面的な戦略、取り組みが具体化していくことになり、点のみを訪れるスポット観光から、域内をゆっくり巡る宿泊型観光の増大や、日帰り観光の複数回来訪に移行していくことが考えられる。そうなっていくと、住民主体のイベント開催や3次産業の起業につながっていき、地域経済に好影響を及ぼすことを想像するのは難くない。

○STEP2 【着地型観光の開発とプラットフォーム機能】

推進体制の観光まちづくりプラットフォームとしての母体づくりと同時に、3市1村の連携を深めるための方策を着地型観光企画づくりから考えたい。連携の目的は3市1村の地域づくりであり、商品化は結果論、副産物的なものだが、前述の協議会の取り組みや住民のアイデアを「見える化」するためには着地型観光企画の立案が有効だと考える。地域資源の主となる歴史文化資産を生かしながら、面的な広がりを持つ価値を創出し、地域全体で売り出す機運を高めることにつなげたい。また、着地型観光を流通させるためには、観光まちづくりプラットフォームから、旅行会社や消費者に対してワンストップでコーディネート、販売しなければならない。そのこともまた結果的に3市1村の連携を高めることにつながっていくものと考ええる。

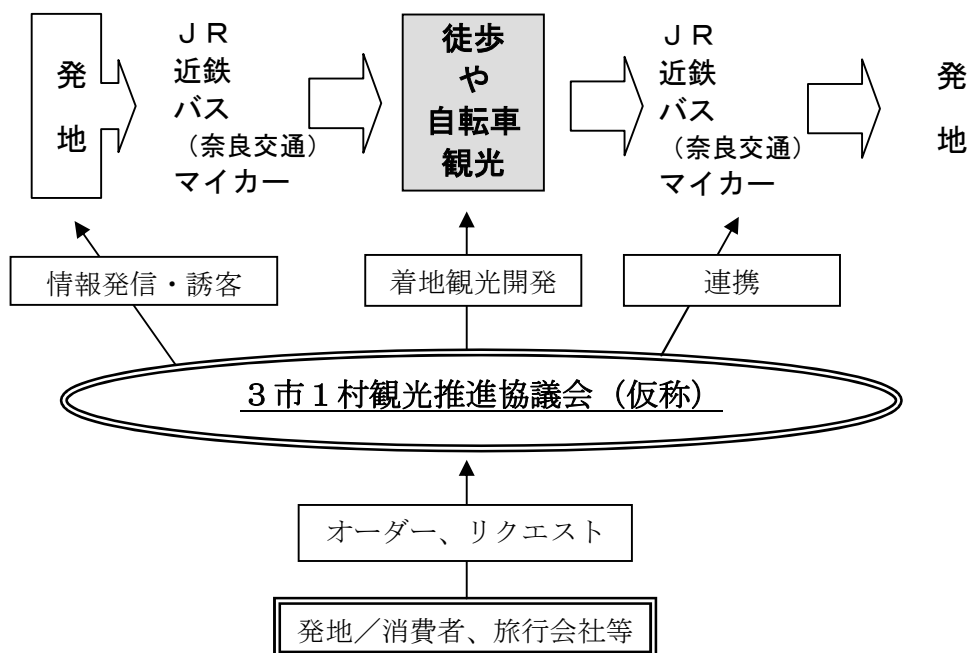


視察後に委員が提案した観光商品案から、着地型観光企画を考えてみたい。以下に委員のアイデアを列記する。

- ・ 山の辺の道を現代風にブラッシュアップし、他の「みちづくり」へ
→山の辺の道を4キロごとに区切り、ウォークステーション機能を整備していく＝歴史文化よりも「歩くこと」に興味を持った若年女性、健康を重視する中高年（具体例：4地域合同のウォーキングイベント）
- ・ 歴史初心者から上級者まで段階的にニーズに応えられるようなガイドングの仕組み
→各地域でのボランティアガイドの連絡会の結成や近隣地域の歴史や資源を学ぶ勉強会の実施等＝知的好奇心が旺盛な首都圏のシニア世代（具体例：大学とタイアップした古代史探訪・日本の始まりをめぐるプログラム）
- ・ 歴史を偶像化させるため人物にスポットを当て「新しい切り口のストーリー＝物語」を生み出す
→全国的に流行している「歴女」や「仏女」が好むマンガ主人公の設定により女性観光客を呼び込む＝30－50代の女性グループ（具体例：大国主命と卑弥呼の謎に迫る！パワースポットの旅）
- ・ 地元住民が参加しながら楽しめるイベント
→山の辺の道から大神神社間のウォークラリーや観光農園での体験ツアー、パワースポット探検＝圏域内の男女

ーなど、いずれも工夫次第で取り組みやすい商品案があがっている。2回目の視察で明日香村のアートイベントを見学したが、これも現代アートと遺跡が連携した新しい商品と

して可能性をみた。また、すでに具体化しているJRや近鉄と連携したウォーキングイベント、桜井市が明治大学と連携した連続講座と現地視察なども面的な広がりを持たせることで、マーケットに対し中南和地域の新しい着地型観光としてアピールできないだろうか。いずれにせよ、地域を代表する歴史文化資産に、既存の観光スポットや食を組み合わせる4市村をどうつなげていくか。そのテーマ、キーワードをどう設定し、対外的な発信力を高められるかが、中南和地域における着地型観光企画の要諦であることは間違いない。地域としての総合力を最大限発揮するための商品化をつねに考慮し取り組みたい（テーマによっては、3市1村以外の市町もフィールドとなる。）。



上図の通り、協議会は、観光まちづくりプラットフォームとして機能することを意味する。まずは協議会から上向きに伸びている【着地観光開発】を中心に域内の連携した取り組みを推進する体制づくりが主となり、その次のステップとして【情報発信・誘客】や【連携】へとつながっていくことになるだろう。そして、発地マーケットからのオーダー、リクエストに応じる機能ということになる。その場合、発地からの要望は3市1村域内にとどまるとは限らず、この協議会が他市町の参画を含めて“外に開かれた”ものでなければならない

○STEP3 【時速3キロの観光まちづくりへ】

中南和地域の着地型観光として、各市村でもウォーキングイベントが定着していることから、歩き観光を提案したい。ここで言う歩き観光とは、域内での移動が徒歩あるいはサイクリングという手段を指す。3市1村を中心とした歩き観光の事業案として以下を提案したい。

○着地型商品開発

徒歩や自転車で移動することが快適で楽しいものに

時速3キロの観光まちづくりは、地域のすべてのものが観光資源になりえるし、逆にマイナス点にもなりうる。そのため、住民参画によるまちづくりが欠かせない。ウォーキングステーション、お散歩コースの開設は住民参画を促進するための取り組みと位置づけた。また、訴求力のある観光資源を結ぶコース、駅を核とした周遊コース等、回遊性の高い代表的なコースから、順次、着地型商品を醸成、増加させていくことが効果的である。

【ウォーキングステーション】

第2回会議時に天理市が手づくり感のある「山の辺の道周辺の飲食店ガイドマップ」を作成していた。これは歩き観光に欠かせない“道草”の楽しみを示したものであるとも言える。委員からも提案があったように山の辺の道、今井町・藤原京界限、飛鳥一帯に共通のサインマークを表示したウォーキングステーションを設置したい。京都府木津川市当尾（とおの）の野菜スタンドが名物化していることを参考に、域内の有人、無人スタンドもウォーキングステーションとして位置づけたい。

【テーマの設定】

歴史観光のみならず、様々な切り口での歩き観光が提案できるのも、この地域の武器である。「パワースポットめぐり」として石上神宮、大神神社、藤原京、石舞台などが代表例だが、ノルディックウォークで歩く健康増進、特産の素麺をメインにした「麺街道」など食べ歩き、天理観光農園のヨガ教室など「ヒーリングスポットめぐり」、大和三山や三輪山登山を全面にした「聖山めぐり」といったことも考えられる。

歴史観光についても、卑弥呼や大化の改新といった時代ごとにコースを設定したり、藤原鎌足や蘇我馬子ら人物にスポットを当てたコースづくりも可能だろう。これらは、自転車観光でも多様なテーマが設定できると考えられる。

【地元住民お勧めのお散歩コース】

3市1村の連携した着地観光開発を周知し、住民の参画と地元の理解協力を得るため、住民お勧めのお散歩コース、お気に入り散策スポットを公募することを提案したい。共通パンフレット「大和あるき道50選」などとして作成したい（添付チラシ案）。

【ウォーキングイベントの開催】

3市1村をめぐるツデーウォーク、婚活ウォーキング、健康ウォーキング、日本黎明ライド（自転車イベント）などの開催。

【冬場の目玉づくり】

観光入込が極端に減少する冬期の対策として、住民参加による灯籠のライトアップやニューメンの振る舞いなどイベントによる集客策を講じたい。

○データベースの共有化

アドバイザー会議の席上でもあった「観光データベースの共有化」を行い、それぞれが互いの資源の価値を理解し相互送客への基礎づくりを進める。また、当地の強味であるボランティアガイドのさらなる充実を図るため相互研修・連絡会議のコーディネートに取り組みたい。

○受け地整備

看板サインの整備、ベンチやトイレを要所に設置することを検討したい。

○JRや近鉄、奈良交通等との連携

発地とを結ぶ運輸機関が熱心に取り組んでいる観光地開発に積極的に関わり、地元サイドからも様々な提案を行いたい。3市1村に点在するJR、近鉄の駅をスタートとするウォーキングコースを所要時間に応じて複数設定するなどし、JRや近鉄に商品化を働きかけたい。また、3市1村が共同イベントなどで2次交通の実証実験等を行い、奈良交通と連携を図りたい。

○発地への情報発信・誘客

情報発信においても協議会が地域情報のプラットフォームとして機能したい。発信先についても「連携」をキーワードに、旅行会社をはじめウォーキング協会、ノルディックウォーキング協会、ウォーキング専門店などに対して、ともに市場を創出する働きかけを情報として発信。3市1村の「歩き観光」をアピールしたい。

まとめ

今回は3市1村が連携して地域協働で動き出すきっかけである。北和、吉野と並ぶ奈良観光の柱を立てる意気込みで、この連携が深化していくことを願ってやまない。住民、観光事業者、行政が軌を一にして中南和地域の観光まちづくりが進められるよう期待したい。